

電子掲示板及び電子メールによる国際協働学習の取り組み

-アイアーン (iEARN) 「シビックス」プロジェクト-

納谷淑恵¹

大阪大学大学院言語文化研究科博士後期課程

〒560-0043 豊中市待兼山町 1-8

TEL 06-6850-6111

e-mail: naya@osk.3web.ne.jp

概要

ICTを活用した教育のNPOであるアイアーン¹では、エジプト、レバノン、ヨルダン、インド、パキスタン、スリランカの6ヶ国を対象とし、電子掲示板及び電子メールを活用した、高校生による国際協働学習として、「シビックス」というプロジェクトをおこなっている。このプロジェクトは、地球市民としての教育と英語運用能力の向上を目指している。本稿では、文化の違いや各国のコンピュータ事情の違いを考慮した上でそのプロジェクトがどのように成り立っているかを報告したい。

1.はじめに

これまでの日本の情報教育においては、コンピュータの操作技術の習得が主目的になっている面があったが、今後は学習者の学習動機を高めるためにも、コミュニケーションが重要な役割を果たすようになっていくと考えられる。

ICTを活用した教育のNPOであるアイアーン (以下 iEARN) では、電子掲示板及び電子メールを活用した国際協働学習の試みとして、1999 年から「シビックス」(以下 'CIVICS')というプロジェクトを行っている。

コミュニケーションを中心とした新しい形の遠隔教育であるこのプロジェクトは、エジプト、レバノン、ヨルダン、インド、パキスタン、スリランカの6ヶ国の高校生を対象とし、文化の違いを越え地球市民となることと、英語運用能力の向上を目的に始められた。

本報告では、iEARN の 'CIVICS' がどのように行われているかを調査・分析することに

より、日本におけるインターネットを活用した国際協働学習のひとつのあり方を提案する。

2. 'CIVICS'

'CIVICS'は1999年9月にアメリカ教育省の援助を受けて始まったプロジェクトである。中東、北アフリカ及び南アジアの国家間で対立している地域の学生をつなぎ、互いの理解を深め、問題解決の努力を導き出すことを大きな目標として始まった。したがって、'CIVICS'に参加した生徒は単にフォーラムで話し合うだけでなく、具体的な社会的活動を行うことをも目指している。そのため、その活動範囲は広く、'CIVICS'フォーラムという枠におさまらず、そこから様々な活動が行われている。

1年目の参加校は6ヶ国から2校ずつ計12校選ばれ開始された。最初の12校はプロジェクト開始以前からiEARNにおいて何らかの活動をしている国々が選ばれた。それらの

International Collaboration on BBS and E-mail
Y. Naya
Graduate School of Language and Culture at Osaka University

国々が、中東及び北アフリカの地域として、エジプト、ヨルダン、レバノンの3ヶ国、南アジアとして、インド、パキスタン、スリランカであった。

2年目には、上記6ヶ国においてワークショップが開かれ、エジプト2校、インド6校、ヨルダン2校、レバノン8校、パキスタン10校、スリランカ3校の31校が招待されている。

‘CIVICS’は今年で4年を迎えており、2002年の現在参加国は6ヶ国から9ヶ国に増え、参加校は150校となり、より大きなプロジェクトに発展している。

3. 研究の方法

本報告では以下の2点に焦点を絞り報告する。

- 1) ‘CIVICS’ではいかに国ごとによる、コンピュータネットワーク事情の違いを克服し、交流学习を可能にしているか。
- 2) 電子掲示板及び電子メールを活用した交流学习では、どのような場合にディスカッションが活発になるのか。

‘CIVICS’の活動を支えるコンピュータシステムについては、IEARNの中心的機能を果しているニューヨークオフィスにて2001年9月7日より10月13日まで調査を行った。具体的な交流内容の調査は、電子掲示板の書き込みを調べる technography²を用い解説した。また、参加者へのインタビューを2002年7月7日より14日までモスクワで行われた第9回IEARN国際会議にておこなった。

調査対象としては、1999年9月から2001年9月までの期間とした。

4. ‘CIVICS’を支えるコンピュータシステムについて

‘CIVICS’に参加するための最低条件は、学校に最低1台、電子メールを送ることのでき

るコンピュータがあるということだけであった。

‘CIVICS’のように複数の国家間で協働学習を行う場合、それぞれの国の経済状況や情報教育に対する考え方の違いにより、コンピュータネットワークの整備状況が異なるのは当然である。従って、‘CIVICS’参加校のコンピュータネットワーク事情もさまざまである。生徒が直接電子掲示板に書き込める学校もあるが、中にはコンピュータの台数も少なく、電子メールしか使用できない学校も存在している。また、生徒が直接書き込むのではなく、教師が生徒の作文をまとめて書き込んでいる学校もあった。

このプロジェクトが継続している理由の1つには、さまざまな形での参加を可能にしているIEARNのシステムがあげられる。交流の拠点となるサーバーはニューヨークのIEARN USA オフィスにある。ここでは常時3台のマッキントシュコンピュータをサーバーとして使用しており、そのうちの1台がフォーラム管理用のコンピュータであった。それらのコンピュータはコロンビア大学に接続されており、コンピュータのトラブルに対する対処などテクニカルサポートは主にコロンビア大学が受け持っている。

この掲示板には、参加者が自由に書き込みをおこなう事ができるが、直接ホームページにアクセスできない場合、または電子メールによる配信を希望する場合には、電子メールでの記入及び配信が可能となっている。

このフォーラム宛に送られてきた電子メールは、自動的に電子掲示板に書き込まれ、同時に書き込まれた情報は、電子メールとして配信されるシステムとなっている。それゆえ、電子メールでしかやり取りができない学校であっても交流が可能となっている。

このように電子メールさえ使用できれば交流が可能なシステムにしているため、決してコンピュータ環境が優れているとはいえない

国家間でも交流が可能となっている。

しかし、この方法に問題がないというわけではない。コンピュータを自由に使える環境にある学生と、学校での使用のみに限られている学生では、フォーラムにおける発言の機会に極端な差ができてしまう。

フォーラムの書き込みを調査すると、活発に発言をおこなっている生徒の場合、本人の個人名で書き込みをおこなっている場合が多い。書き込みの頻度、時間帯をみると自宅から書き込んでいる可能性が強かった。

したがって、フォーラムでのディスカッションは、自宅にコンピュータがあり、自由にフォーラムに参加できるものが中心となり議論が進んでいるのではないかと疑問を持った。

この点について、実体を明らかにするために、かなりの頻度で書き込みをおこなっているスリランカの生徒及び担任の教師にインタビューをおこなった。

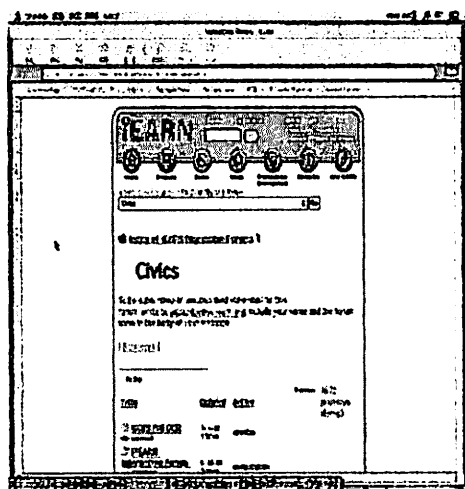


図1. 'CIVICS'フォーラム画面

5. Royal College in Colombo 校

フォーラムに参加しているスリランカの Royal College in Colombo (以下 RC 校) の場合を例に、プロジェクトへの参加の実態を

明らかにしたい。

RC 校には、'CIVICS'フォーラムへの書き込みが最も多い、生徒Uが在籍している。

RC 校は小学校から大学まである、マンモス校である。RC 校では、全校生7000人の生徒に対しコンピュータ数は35台である。

情報の時間は週1時間のみで、14才以上の生徒が授業としてコンピュータを扱っている。したがって、情報あるいはその他の教科の授業時間を使って国際交流をすることは、不可能であった。

RC 校の場合、国際的な交流に興味のある生徒をつくり、授業外の課外活動として'CIVICS'に取り組んでいた。'CIVICS'に熱心に取り組んでいる生徒の多くは自宅にコンピュータを持っており、自宅から発信することにより自由に交流を行っていることが分かった。

このことから、'CIVICS'には全ての生徒が参加できる訳ではないことが明らかになった。'CIVICS'に参加し、ディスカッションに活発に参加するためには、参加者一人に対し1台のコンピュータが理想的であり、しかも自宅からアクセスできることがもっとも望ましいと分かった。

6. 'CIVICS'フォーラム

次にどのような場合に議論が活発になるかについて述べたい。

議論が活発になる場合には、大きくわけて2つのパターンがある。一つは意見が対立する場合、他方は互いに話し合っている言葉の意味を作り上げていく場合である。しかし、そもそもなぜ議論をする必要があるのか。それらの議論の前提となる'CIVICS'の目的をここで再度確認することとする。

'CIVICS'の第1の目的は、地球市民となることである。ここでいわれている地球市民とは、いかなる存在であろうか。

iEARN の規約³では、以下のことが目標に含まれている。

- 1) 平等な権利と自己決定権に基づいて全ての国の若者の間に友好的な関係を発展させる。
- 2) 世界が直面する地球規模の問題を明らかにし、解決するために活動し、普遍的な平和を強めるために、全ての国の若者に協力し協働で学び活動することを奨励する。
- 3) 人種、性別、言語、文化、あるいは宗教による区別なく、すべての人のために、人権と基本的な自由への敬意を促進し、奨励する。
- 4) 文化の個性を尊ぶと同時に違いを共有する

これらのゴールから iEARN が目指す地球市民とは、互いの権利を認めあい平等な関係のもとに問題解決を目指していくという姿を描き出すことができる。

また、シンガポールの教育相 Radam Teo Chee Hean は、地球市民の条件ともいえるべき国際対話能力⁴を以下のように定義している。

- 1) 自分の意見を持ち、発言することができる。
- 2) 異文化に対する理解がある。
- 4) 相手との相互作用により、新しい価値観を受け入れたり、創りだしたりすることができ、そのことによる自分自身の変化をも受け入れられる柔軟な思考の持ち主。
- 5) 異文化の者と交流し、対話できる能力。

上記の条件を考慮に入れ、'CIVICS'における地球市民の定義を以下のように定めてみた。

- 1) 自分の意見を述べ、対立を恐れぬ。
- 2) 意見が対立しても議論のテーブルからおりない。
- 3) 平和的な解決をはかろうとする態度を保つ。
- 4) 自文化を尊重しつつ、しかもその枠を越え

て行く柔軟な思考を持つ。

- 5) 共通理解を作ろうとする態度を持つ。
- 6) 異文化を理解する柔軟な思考を持つ。

'CIVICS'フォーラムにおける交流は、基本的には生徒同士が自由にメッセージをやり取りする方法で運営されている。一人の生徒があるテーマについて意見を述べると、その意見に対するコメントが寄せられ、それに対する返事がまた来るといった形で交流学習は進んでいる。調査期間中に書き込まれたトピック数は600におよぶ。

価値観を伴う言葉は、それぞれの文化によって定義が異なる。従って、異なった文化に属するものの話し合いでは、言葉に対する定義をし、共通認識を持たなければ議論はすれ違い、不要な争いを生み出す可能性がある。

言葉の定義をめぐってディスカッションが活発に行われた例として、Peace と Right をここでは取り上げる。

まず Peace (平和) についてであるが、辞書⁵によると Peace とは、1 No War a) a situation in which there is no war between countries or in a country と定義されている。しかし、'CIVICS'のフォーラムで語られる Peace は、今、目の前でおこなわれている流血をとめることであり、父親が仕事で遅れて帰ってきても、テロにあったのではないかと、心配しなくても良い状態として表現されている。

生徒にとって、Peace とは、「戦争がない状態」というような抽象的な概念ではなく、日々の生活の中での具体性を持った言葉なのである。

このように、ある言葉が自分の経験を通して語られる時、その言葉は、その具体性とともに発した生徒のものになると言える。そして、その概念は'CIVICS'フォーラムという場所で語られ共有されることにより、文化の違いを越えて共通の概念を持ち合うことになり、

それが議論のための共通の言語となっていくのである。'CIVICS'のフォーラムで行われていることは単なる外国語としての英語学習ではなく。英語という外国の言葉を自分達の共通の概念を持った、共通の言語にして行く作業であるといえる。

そうしてはじめて、文化の異なるもの同士であっても、共通の基盤のもとに話し合いが可能となって来るのである。

また、ディスカッションに参加するもの同士は、時にはぶつかりあうことにより、より深く、広い理解を築いている。

次にその例として、Right という言葉をめぐるディスカッションを紹介する。

アフガニスタンで仏像破壊が起った後、'CIVICS'フォーラムではその是非を巡ってディスカッションが行われた。そのディスカッションの中で、Right (正しい) という言葉をめぐって意見が交わされた。

パキスタンの学生である、S1は 2001 年 3 月 7 日メッセージで right という言葉をこう定義している。

The term right and wrong are very fallible and quite meaningless.

ここで述べていることは、正しいあるいは間違っているという言葉は誤りがちな言葉で意味がないということである。その理由として、

Morality has so much fluidity that it varies between all human beings.

道徳というものは流動的で、人それぞれによってさまざまであるからとしている。

これに対しスリランカの学生 S2 は次の日である 3 月 8 日には自分が考える right の定義を出している。その後、right をめぐる議論は、4 月にはいり、「動物の生け贄問題」でも再び起り、この二人の議論を中心に、他の学

生も議論に参加し、この話題で一ヶ月以上もディスカッションが続くことになった。

最終的に、right をめぐる議論は、4 月 24 日の S2 のメッセージでお互いの関係を修復した形となった。

Friend, this time, i do agree with you. I also have some suggestions and would like to get others idea about it.

Here are my suggestions,

*1) We should give answers for the questions people ask us, we should not try to escape from the topic...

今度は友達と呼べます。僕もあなたに賛成です。また、僕も提案があります。そしてほかのみんなの意見も聞きたいです。

以下が僕の提案です。

1) 尋ねられた質問には答えること、そしてその話題から逃げないこと。

Right について議論に関しては、お互いに共通の認識を作り出すまでにはいたらなかった。しかし、お互い議論のルールを定め、その話題から逃げることなく、根気よく話し続けて行くことで合意を取り合った。

このように、'CIVICS'ではお互いの意見が対立しても、そのことで決して議論をやめてしまわず、お互いが納得する共通の基盤を築いて行く努力が払われるのである。

すでに述べたように、ディスカッションが活発になる場合には、大きく分けて2つのパターンがある。1つは Right の定義をめぐるディスカッションに代表されるように、意見が対立した場合である。この場合、お互いの共通理解を作りだすためにかなりのディスカッションが行われる。

他方は、共同で言葉の意味を練り上げていくような場合である。

一例として、Peace についてのディスカッションを取り上げた。Peace の意味については、反対意見がでることによって議論が盛りあがるといったようなことはないが、他の人からの提案に、自分の経験を述べることにより、その言葉に対する具体性を付け加え、その言葉の意味により大きなイメージの膨らみを持たせ、互いに理解可能な共通の言語を築いていっている。

また、これらのディスカッションが活発になる場合には、往々にして、その背景として社会的な事件が起こっていることも考慮に入れなければならない。

Right をめぐるディスカッションでは、その引き金としてバーミ안의仏像破壊があったこと、また Peace をめぐるディスカッションでは、頻発するテロ及び戦争への不安があることを忘れてはならない。

反対に、意見が活発にならない場合には、教師が授業で生徒に作文を書かせ、それをまとめて載せた場合などがある。これらの作文では一般に向けて書かれたものが多く、それに対するコメントも一般的な感想になりやすく、議論がおこりにくい。

このように教師が生徒の作文をまとめて送る発表方法は、コンピュータの台数が少なく、個人個人に直接コンピュータで意見を書かせることが出来ない場合に、おこなう方法である。このような方法で生徒の意見が投稿された場合、それに対しコメントを送っても、作文を書いた個人から返事が返って来ることがなく、そこで話し合いが終わってしまう。

このことから参加者同士のインタラクションが起るためには、やはり個人としての意見を発表し、それに対し個人として対等に意見を述べあえる環境が必要であるとわかった。

'CIVICS' に活発に参加している生徒及び、担任の教師へインタビューをおこなったが、活発な意見交換をしている生徒は、個人の自宅から行われていることが明らかになった。

このことは、ディスカッションへの参加の度合いが、コンピュータ環境によって左右されていることを示している。

自宅から自由にディスカッションフォーラムに参加できるものは、投稿の回数も多く、従って他の国の参加者とのディスカッションすることも多い。

このことから、コンピュータ環境と、ディスカッションへの参加の度合いには相関関係があると言える。

7. おわりに

複数の国の参加からなる、国際協働学習においては、交流校のコンピュータ事情を考慮し、どのような形態でも参加できるようなシステムを構築することが必要である。したがって、デジタルディバイドを少しでも解消し、より多くの国からの参加を可能にするためには ITC 技術の要求度を低くする事は重要であると考えられる。'CIVICS' は電子メールで参加できるように構成されており、その点についての配慮がなされている。

コンピュータネットワークを活用した情報教育はどうしても先進国の取り組みが中心となり、iEARN の活動の中でも、アメリカをはじめ、ヨーロッパの生徒の発言に片寄りがちであった。'CIVICS' が、中東及び南アジアの人々の意見を iEARN の活動の中に取り入れ、今まで発言の少なかった地域からの発言を増やしたことは意義深い。

しかし、調査期間内では、自宅にコンピュータをもつ比較的裕福な家庭の学生が、自由に意見を述べることができ、他の人々と交流をしているという現状がみられた。

ディスカッションに活発に参加するためには、一人ひとりの生徒が自由な時間にディスカッションフォーラムにアクセスできるコンピュータを持つことが理想的であるということも事実である。

活発な議論を導き出すためには、それぞれ

の生徒が独自の個性を持った一個人として異文化のものに語りかけ、直接対話できる環境を整える必要がある。

今後、より多くの生徒が交流に参加していくためには、参加各学校のコンピュータ台数を増やし、生徒に自由にコンピュータにアクセスする時間を設けることが望まれる。そうすることにより、より多くの生徒の意見が反映されるようになるであろう。

コンピュータネットワークは日常的空間を「情報的に拡張した」環境であり、そこでどのような交流が起こるのか、まだ未知数の分野である。

‘CIVICS’は、問題を含みつつも、そのあるべき方向を指し示しているといえる。そういう意味において、‘CIVICS’は今後の日本におけるインターネットを活用した国際協働学習の取り組みに新たな視点を提供しているといえる。

【註】

- 1 1988年に設立された世界最大のICTを活用した教育のNPO。
- 2 エスノグラフィの一形態、ICTを活用した分野で使用する。本稿の場合調査フィールドが電子掲示板であった。
- 3 iEARNの基本理念を定めた Constitution.
URL: <http://foro.iearn.org/>
- 4 Speech by Radm Teo Chee Hean, URL:
<http://www1.moe.edu.sg/speeches/2000/sp31032000a.htm>
- 5 Longman Dictionary of Contemporary English Third Edition (1995) Longman

Reference:

Bodin J.S. (1998) *Proximate Human Contact Through The Internet: A Technography Of An Intercultural Global Electronic Learning Network, I*EARN (International Education And Resource Network)*, PhD dissertation,

The University of New Mexico

iEARN (International Education and Resources Network) (1998) *Communities in Collaboration, An English as Second /Foreign Language (ESL/EFL) Exchange and Training Project for Professional Educators in the Near East, North Africa, and South Asia.*

iEARN (2002) *CIVICS-3 Teachers' Training -Pakistan Participants' Handbook*

iEARN URL: <http://www.iearn.org/>

長尾確(1996)『認知科学モノグラフ②インタラクティブな環境をつくる』共立出版